

令和7年度 地域循環共生圏づくり支援体制構築事業 実施計画書（継続団体用）

活動団体の本事業での活動テーマ

『陸の孤島の歴史が育むエネルギー自給を
中心とした地域循環共生圏づくり』

活動地域 : 北海道石狩市浜益区
活動団体 : 浜益地域循環共生圏推進協議会
「続ふかんば」

中間支援主体 : NPO法人ezorock

参加団体の基本情報

(1) 活動団体の基本情報

団体名	浜益地域循環共生圏推進協議会「続ふかんば」
活動地域	北海道石狩市浜益区
専門性・強み	
# 1988年から活動していた市民団体「浜益・自然に学ぶ会」(ふかんば)の中心メンバーと一緒に、かつての活動や想いを引き継ぐ # 世代を通じた対話や技術や文化の継承が自然に生まれている # 地域住民や関係人口が共に地域ビジョンを話し合う場づくりに参画 # 陸の孤島に守られた自然環境と文化 # 日本有数の過疎地域 # 関係人口受入	

団体概要
市民団体「浜益・自然に学ぶ会」(ふかんば)は、1988年12月に人と自然の共生及び地域に根差した仕事づくりを目指して設立。約2年間で18号まで機関紙「ネットワーキング浜益」を刊行し、その後活動を休止。以降、浜益地区内で地域づくりに関する様々な活動が行われてきたものの、自然との共生を切り口に多セクターが連携した取組みは展開されてこなかった。そのため本事業をきっかけに、世代を超えた新たな協議会を設置した。これまでの浜益の歴史を踏まえながら、地域循環共生圏の推進を図る。ふかんばの基本構想を広く伝え、共有されることにより、地域の環境・経済・社会への貢献と、ローカルSDGs事業の実現を目指す。

(2) 中間支援主体の基本情報

団体名	NPO法人ezorock
活動地域	北海道
専門性・強み	
# 青年層の環境・地域活動への参画促進 # 石狩市浜益区の地域づくりに10年以上参画 # 石狩市浜益区に拠点を構え、大学・企業研修の受入や関係人口の送り出しを行う # 青年層のボランティア参加から、新たな仕事づくり、地域おこし協力隊のフォローアップなど地域での暮らしに関するサポート実績がある # 主体であり、中間支援である団体内に複数の役割と顔を持つ	

団体概要
“ezorock”は、「社会を揺り動かす」という理念のもと、2000年に行われた「RISING SUN ROCK FESTIVALにおける環境対策活動」をきっかけに2001年4月に設立。青年層のネットワーク拡大とともに、北海道の地域課題に対して、若者のアイデアやパワーを届ける事業を展開。活動を通して若者が自らの人生と社会を切り開いていく機会を作り出している。東日本大震災をきっかけに、北海道各地の関係人口創出に関する事業を展開しており、オンライン・オフラインの両輪で青年層が地域づくりに参画するきっかけを生み出している。石狩市浜益区は関係人口創出のモデル地区として、拠点を構え、一次産業や地域活動などへ参画。

活動団体と地域の紹介

【地域の紹介】

石狩市浜益区は、札幌市中心部から車で約90分程度の距離に位置する厚田区の北端からさらに北へ約30km、雄冬岬に至るまでの海岸に沿った地域。平成17年の合併（石狩市・厚田村・浜益村の1市2村）以前は、浜益郡浜益村といい、江戸時代からの古い歴史を持つ。幕末には荘内藩（現在の山形県鶴岡市を拠点）が陣屋を構える北方警備の拠点となり、その後、明治から昭和初期にかけてはニシン漁の千石場所として栄え、一時は人口8000人いたといわれる。ニシン漁が終わり人口が減少し、現在では人口約1000人程度となっている。



まちの産業の中心は1次産業で、特に良質な米の生産やサケやニシン、ホタテ・ウニ・タコ・ナマコなどの漁業が盛んである。また、果樹栽培も盛んであり、北海道最古の果樹園のひとつがある。道路が整備されていなかった時代では主な交通手段は船であったため、陸路に行くには、南は濃昼山道、北は増毛山道という険しい道を行かなければならず、かつては「陸の孤島」とも呼ばれていた。



活動団体の目指す地域の姿

■ 地域循環共生圏の構築を通じてありたい地域の姿

地域内外に多様な形で関わる人々と共に「陸の孤島」である地理的条件が育んできた浜益の文化と自然を生かし、エコツーリズムの促進やサステナブルな暮らしのモデル構築を目指す

■ 地域に必要なプラットフォームの体制や仕組み

- ①大学連携などにより、関係人口を受け入れ、地域の担い手として協働すると共に分散型で事務局機能を担う仕組みづくりを行う
- ②「ネットワーキング浜益」を再編し、取り組み状況と併せて情報発信を行うことで地域の機運を高める
- ③地域内で生まれようとする事業に対して専門家のマッチングや担い手確保等サポートする体制づくり

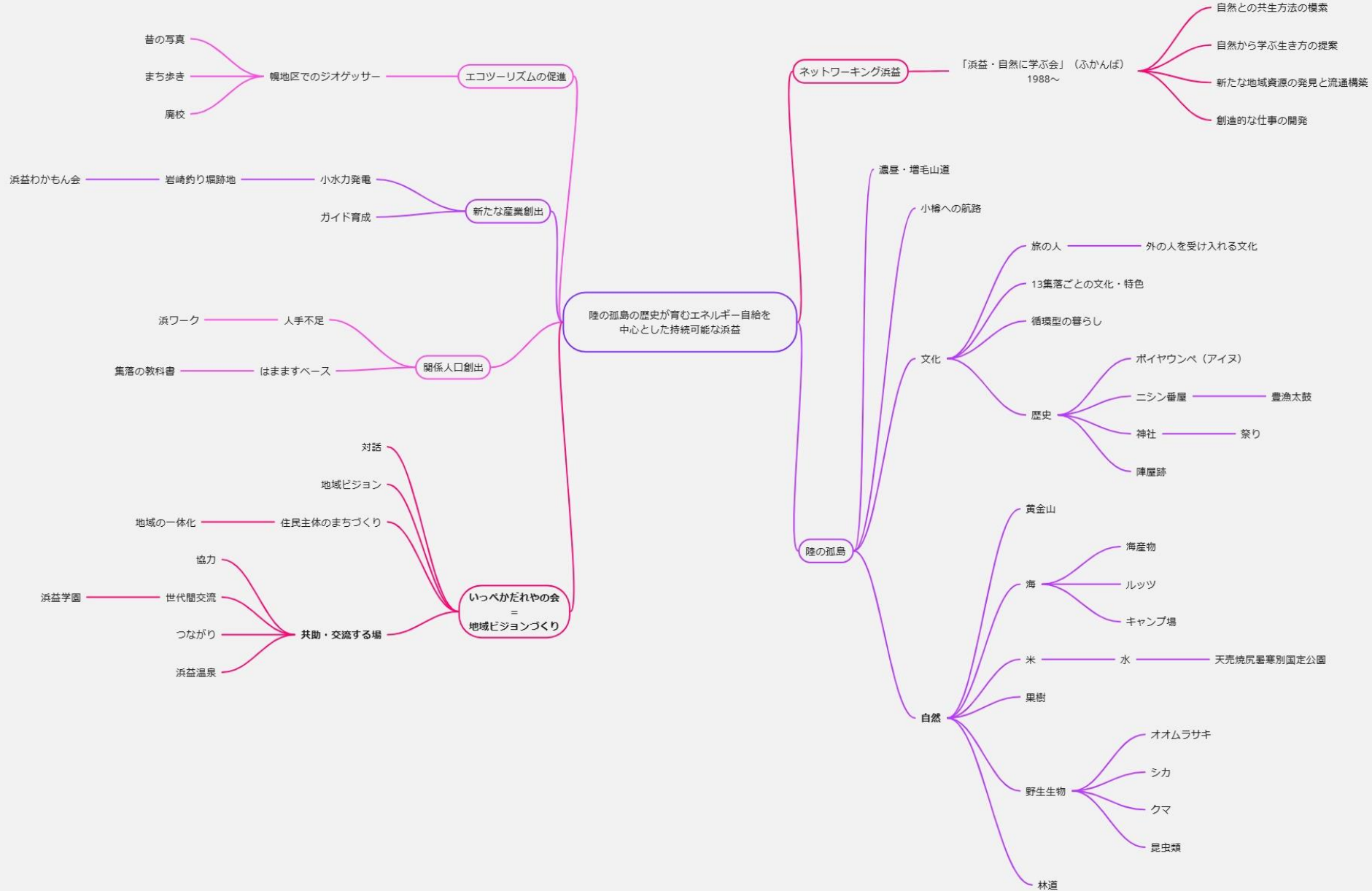
■ ローカルSDGs事業として取り組む内容

- ①豊富な水資源を活用した、小水力発電事業の創出
- ②地域資源を活用したサステナブルツーリズムプログラムの開発
- ③木質バイオマス資源の活用やバイオ炭等、脱炭素事業の創出

■ 地域の現状と課題

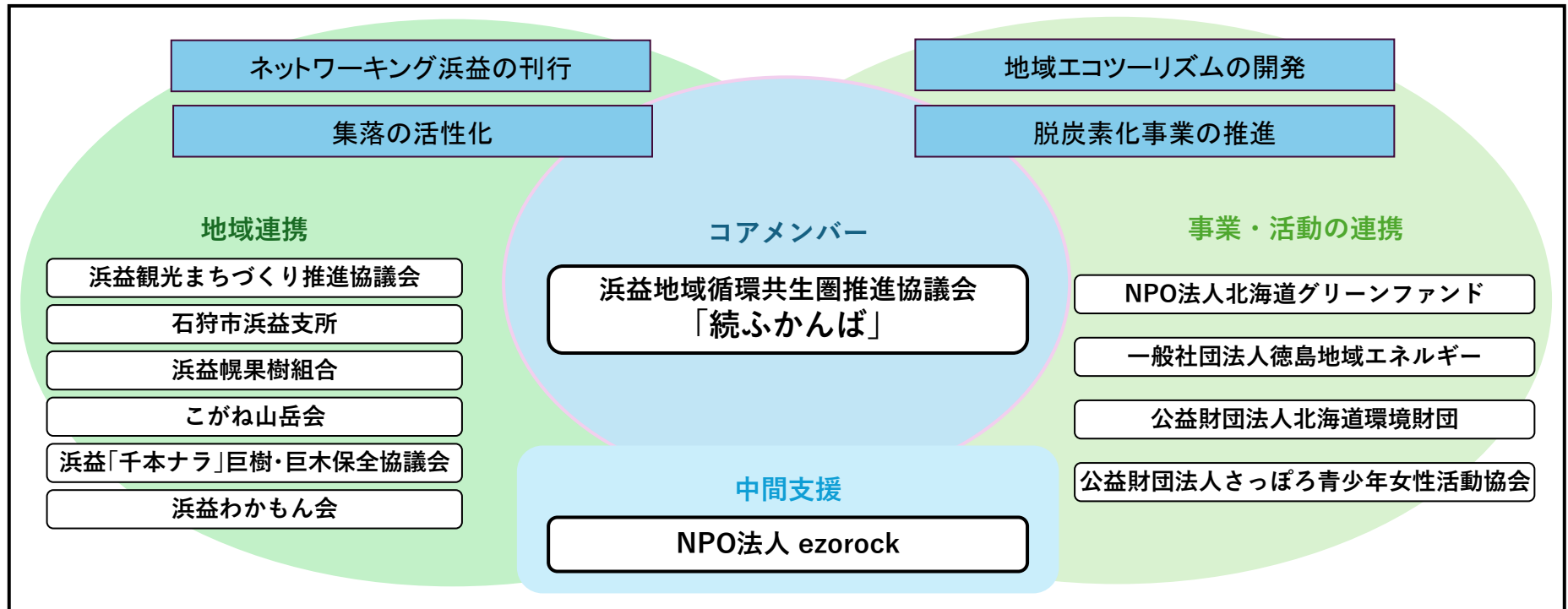
急激な少子高齢化が進み、令和7年4月1日現在の人口は989人、高齢化率57%であらゆる分野の担い手不足が深刻さを増している。また、石狩市合併から20年を迎える2025年度末には地域自治区制度が廃止になる。行政サービスの維持や担い手の移行に関する議論が急務であり、これまで以上に地域住民が主体となった地域づくりが求められている。一方で、海水温上昇やエゾシカ個体数増加など環境要因により、地域の主要産業である漁業や農業、果樹産業にも大きな影響が表れている。そんな中、2024年度には地域住民が主体となった地域ビジョンを話し合う「いっぺかだれやの会」がスタートした。毎回地域住民、地域に関わる関係人口など30名以上が集まり、これまでの浜益とこれからの地域の姿について話し合いを進めている。「いっぺかだれや」は浜益弁で「集まって、話そう」の意味を持ち、浜益の地域づくりの中心は『対話』であることを参加者全員で確認することができた。また、具体的な地域課題も話題として提供され、課題を共有しながら、他世代、他セクターが混ざり合って話し合う素地が生まれつつある。

現時点のマングラ



“地域プラットフォーム”のイメージ

現時点での体制



足りない資源（ヒト、モノ、資金、情報、等）※地域内、外も含む

マンパワー、担い手不足、協働意識の醸成、多セクターが連携した取組み・体制、
地域資源を再評価する仕組み、地域資源を活かした事業

ローカルSDGs 事業の詳細

旧釣り堀跡地における小水力発電実証事業		
あらすじ		
旧浜益フィッシングパーク（岩崎養魚場）は、浜益実田地区に存在した大型の釣り堀である。約10年前に閉業後活用は進んでいなかった。地域の若者の中に、養魚場関係者があり、川から水を引き込む水利権が残っていることが判明し、利活用に向けての検討が開始された。本事業は、担い手、行政からの予算減少が進む中、水源地であるという地域資源、特徴を活かし、サステナブルな事業創出を目指すものである。		
ストーリー		
石狩市浜益区は人口約1000人、高齢化率約60%の全国的にも少子高齢化、担い手不足の深刻な地域である。しかし、かつて「陸の孤島」と呼ばれた地形に守られた水源や生物多様性等自然環境や文化が今なお根付く地域である。また、地域内には異業種の若者が発足した「浜益わかもん会」があり、会員は約40名である。浜益わかもん会では、子ども向けイベントやスポーツ教室等住民を対象としたイベント・活動を主催するだけでなく、空き店舗や土地など未活用の資源の活用についても、若者らしい自由な発想で利活用を検討し、実行している。本事業の対象である浜益フィッシングパーク（岩崎養魚場）についても、地域内に眠る未活用の資源として検討していたが、中心となる事業は見つけられていなかった。そこで、関係者として相談を受け、小水力発電に関するアイデアが発案された。養魚場跡地において、若者たちによる養殖事業等自主事業と、事業として資金調達源にもなり得るであろう小水力発電の両立を目指す。		
事業の骨子		現時点で想定される課題・ボトルネック
①ありたい未来	養殖など自主事業と並行して、小水力発電所が完成し、売電収益を地域づくりの資金として循環させていると同時に、発電所をはじめ周辺の自然環境を活かした環境教育活動が行われている。	・川の水量によって発電量が左右される（R7調査継続予定） ・わかもん会事業との兼ね合い ・丁寧な意思決定、地域内での合意が必要 ・他の水源にも展開を考えた際に、水利権や、災害時の対応などのリスク対応
②課題	・資金集めに関する知識や方法 ・小水力発電が実施可能な資源量なのか調査中 ・事業主体の検討	
③なぜこの事業をやるのか（Why）	・地域の資源を活用し、地域づくりのための資金調達 ・小規模地域における地域資源を活用した事業創出のモデルづくり ・街の中に水源があることから、身近に利用できる再生可能エネルギーとして、認知を広げる	
④地域資源	・浜益フィッシングパーク（岩崎養魚場）跡地 ・水源	
⑤商品・サービスの具体的な内容（What）	浜益フィッシングパーク（岩崎養魚場）跡地（水源：逆川）を活用した、小水力発電（最大●W？）	
⑥担い手（Who）	・浜益わかもん会（他事業の創設） ・NPO法人ezorock（関係人口の送り出し） ・（株）市民風力発電 水力発電事業部（調査手法についてのレクチャー、設置に向けた技術サポート）	課題・ボトルネックを乗り越えるために力を借りたい人物・企業像
⑦事業で生じる循環	・売電収益を、地域内に還元する仕組みにすることで、地域づくりに活用できる資金源とすることができ ・小水力の事例は道内に珍しく、さらに、地域づくりと関連しているため、注目度が高いことが予想される。視察や実習など、新たな人脈形成につながる事が予想される	・技術面での協力者 ・類似事例について詳しい専門家や事例を話せる人 ・資金調達に関するアドバイザーなど
⑧事業で生じる成果	・再生可能エネルギーによる、地域内での資金面の循環 ・地域における再生可能エネルギーの新たな産業としての可能性を見出	

3 力年状態目標

■ 2026年度末の状態目標

- ①ふかんばの基本構想を軸にした事業が創出され、実践している
- ②開発された地域エコツーリズムを継続して実施していくための運営体制が整っている
- ③脱炭素化事業推進に向けて、浜益の自然資源・地域資源を活用した事業が開始されている

■ 2025年度末の状態目標

- ①勉強会を実施し、ふかんばの基本構想への理解が深まり、事業創出に向けた機運が高まっている
- ②地域エコツーリズムの開発を進め、事業化に向けた運用体制構築を進めている
- ③脱炭素化事業推進に向けて、浜益の自然資源・地域資源を活用した事業の試験的運用を進めている

■ 2024年度末の状態目標と振り返り

- ①機関紙「ネットワーキング浜益」の読み解き・再録冊子を配布することによって、ふかんばの基本構想(*1)が地域内に周知されている
(*1)「自然との共生方法の模索」「自然から学ぶ生き方の提案」「新たな地域資源の発見と流通構築」「創造的な仕事の開発」
→「ネットワーキング浜益」の再録冊子を地域イベントや集まりの場で配布し、予想以上の反響を得ることができた。また、「ネットワーキング浜益」と現在の浜益の姿を重ねて発信するnoteへ記事投稿を行い、地域外でも浜益での活動の軸を発信することができた。
- ②地域エコツーリズムの開発に向けた試験的なプログラム実施を進めている
→幌地区での古い写真を活用しながら、地域の方と共にまち歩きを行うワークショップを実施し、体験プログラム開発のための情報収集を行った。この手法は他地域からも注目されており、今年度浜益区以外での展開を検討している。
- ③脱炭素化事業推進に向けて、浜益の自然資源・地域資源の調査や勉強会を実施して理解が深まっている
→小水力発電に関する基礎調査、勉強会を進めた。

中間支援主体のありたい姿

■ 中間支援主体としての獲得目標

- ・アクションサイクルを、関係人口と共に展開できるモデルづくりを行っていききたい。
中間支援機能を多様な関係人口が分散して担えるようになる姿を目指したい。
- ・専門家ではない若者が地域に関わることで地域の主体性が若者によって引き出されながら、共に学び、成長していくモデルをつくりたい。専門家の介入は最小限に、地域と関わる若者の主体性を引き出していききたい。
- ・写真など古い情報を元に地域住民と関係人口が混ざり、これからの地域を考えるモデルづくりを行い、他地域へ広げていきたい。

■ 中間支援主体としての本事業終了後の地域づくりへの貢献

地域運営組織や小規模多機能自治といった地域循環共生圏との関連のある動きに対して、地域の中だけでは若者のマンパワーが不足してしまう。北海道において、地域の主体性を引き出しながら、双方向に学びが生まれるような関わりを作れる中間支援主体として発展したい。

そのためのノウハウとして下記の取り組みを地域に関心を寄せる若者と共に進められる技術を身に着けたい。

①「現在」(いま)を知る「集落の教科書」制作ワークショップ→**すでに浜益区にて実施済み**

②「過去」を知るワークショップ→**本事業にて検討中・モデル作成**

地域の過去の取り組みや資料、写真を元に、昔のまちづくりに若者が注目。取材、収集・整理などを通して、時代背景やその地域の成り立ちに関心を寄せる体験型ワークショップを確立、各地で提供できるように。→若者にとっては地域を知る機会に、地域にとっては、取り組みを通して、その地域を再評価しつつ、今の時代に残す必要のあるものを見つける

③「未来」を考える「地域ビジョンづくり」ワークショップ→**本事業にてモデル作成**

集落の教科書及び過去を知る資料収集ワークショップによって集められた情報を元に、未来を考える地域ビジョンづくりを進める対話の場づくりを進める

④これらの基礎情報を元に、持続可能な地域を推進するための市民による自主的な取り組みのプロジェクトの立ち上げ

⑤各プロジェクトを推進していくための伴走支援及び活動への若者が参加する機会の創出

中間支援主体の支援・取組計画

■ 中間支援主体の1年間の支援目標

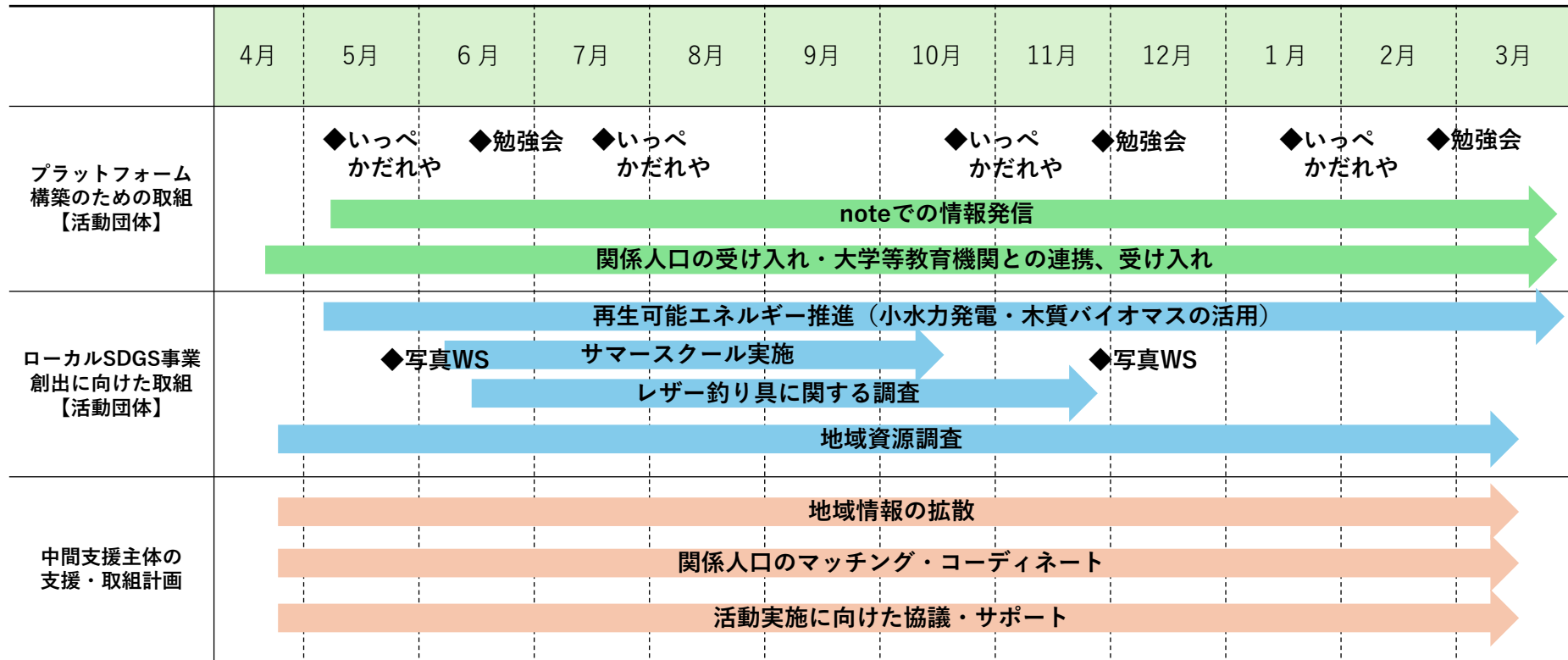
- ・地域内で地域循環共生圏の考え方（自然環境を中心とした地域づくり）がさらに醸成され、「いっぺかだれやの会」にて自然環境に関する話題が増えている。
- ・ローカルSDGsに関する事業創出に向けて、具体性のある検討を進めることができる。
- ・地域外から来る若者の姿がより浸透し、大学との連携プロジェクトが進んでいる。

■ 支援計画

	活動団体の取組における現状と課題 (見立て)	課題を解決するために必要と考える手段 (打ち手)
①	年々人口減少が進み、あらゆる分野において、慢性的に担い手が不足しており「地域住民」＋「関係人口」の協働を継続的なものにしていく必要がある	さっぽろ圏からの関係人口を送り出すと共に、大学との協働プロジェクトを推進し、主体的な地域外のリソースを活用できる状態を目指す。
②	「ネットワーキング浜益」再録冊子配布等によりサステナブルな暮らしの視点で地域を再認識する機会は増えたが、地域内に浸透したという状況には至っていない。	勉強会や「いっぺかだれやの会」で実際に浜益で活動する関係人口が活動報告や意見交流を行うことで、自然に地域内で自然環境に関する話題が増える状態を目指す。
③	勉強会の開催などによりローカルSDGs事業に関する機運は高まりつつある。	再生可能エネルギーに関する事業の具体化を目指すことで、地域内外に対しモデルとなり、地域資源の再認識に繋げる。

活動・支援スケジュール

■スケジュール



備考（補足説明など必要な場合は記載）